

蛇くひ

泉鏡太郎

青空文庫

にし じんつうがは ていぼう もつ かぎり ひがし まちはづれ
 西は神通川の堤防を以て劃とし、東は町盡の樹林境
 な みなみうみ いた つ きた りふざん ふもとをは このあひだ
 を爲し、南は海に到りて盡き、北は立山の麓に終る。此間
 りみとほ げんや さんすゐ かけい そのかはまうと
 十里見通しの原野にして、山水の佳景いふべからず。其川幅最
 ひろ まちもつとちか の やせまところ がうやしきたんぼ とな
 も廣く、町に最も近く、野の稍狭き處を郷屋敷田畝と稱へて、雲
 雀の巢獵、野草摘に妙なり。
 こゝむかしほくゑつなだい けんじ さつさなりまさ べつげふ
 此處往時北越名代の健兒、佐々成政の別業の舊跡にして、
 いまのこ つきやま こふじ よ
 今も残れる築山は小富士と呼びぬ。
 かたへ ほんえのき う としふ たいじゆ うつさう ひぢくろふ
 傍に一本、榎を植ゆ、年經る大樹鬱蒼と繁茂りて、晝も梟
 む たす からすねぐら か やいんひとじづ いちぢん かげだ はら
 の威を扶けて鴉に峙を貸さず、夜陰人静まりて一陣の風枝を拂
 へば、愁然たる聲ありておうおうと唸くが如し。

されば爰に忌むべく恐るべきを（おう）に譬へて、假に（應）といへる一種異様の乞食ありて、郷屋敷田畝を徘徊す。驚破「應」來れりと叫ぶ時は、幼童婦女子は遁隠れ、孩兒も怖れて夜泣を止む。

「應」は普通の乞食と齊しく、見る影もなき貧民なり。頭髪は婦人のごとく長く伸びたるを結ばず、肩より垂れて踵に到る。跣足にて行歩甚だ健なり。容顔隱險の氣を帶び、耳敏く、氣鋭し。各自一條の杖を携へ、續々市街に入込みて、軒毎に食を求め、與へざれば敢て去らず。

初めは人皆懊惱に堪へずして、渠等を罵り懲らせしに、争はずして一旦は去れども、翌日驚く可き報怨を蒙りてより

後は、見すく、米錢を奪はれけり。

渠等は己を拒みたる者の店前に集り、或は戸口に立並び、

御繁昌の旦那客にして食を與へず、餓ゑて食ふもの何なるか

を見よ、と叫びて、袂を深ぐれば畝々と這出づる蛇を掴みて、

引斷りては舌鼓して咀嚼し、疊とも言はず、敷居ともいは

ず、吐出しては舐る態は、ちらと見るだに嘔吐を催し、心

弱き婦女子は後三日の食を廢して、病を得ざるは寡なし。

凡そ幾百戸の富家、豪商、一度づつ、此復讐に遭はざ

るはなかりし。渠等の無頼なる幾度も此舉動を繰返すに憚

る者ならねど、衆は其乞ふが随意に若干の物品を投じて、其

悪戯を演ぜざらむことを謝するを以て、蛇食の藝は暫時休憩

つぶや
を眩きぬ。

渠等米錢を惠まるゝ時は、「お月様幾つ」と一齊に叫び

連れ、後をも見ずして走り去るなり。ただ貧家を訪ふことなし。

去りながら外面に窮乏を粧ひ、囊中却て温なる連中には、

頭から此一藝を演じて、其家の女房娘等が色を變ずるに

あらざれば、決して止むることなし。法はいまだ一個人の食

物に干渉せざる以上は、警吏も施すべき手段なきを如何

せむ。

蝗、蛙、蛇、蜥蜴の如きは、最も喜びて食する物とす。語を寄

す(應)よ、願はくはせめて糞汁を啜ることを休めよ。もし之

を味噌汁と洒落て用ゐらるゝに至らば、十萬石の稻は恐らく立

ちどころ
處に枯れむ。

もつと 最も饗膳なりとて珍重するは、長蟲の茹初なり。

くちなせうりあんばい 蛇の料理鹽梅を潜かに見たる人の語りけるは、(應)が常

うの居所なる、屋根なき褥なき郷屋敷田畝の眞中に、銅に

て鑄たる鼎(に類す)を裾ゑ、先づ河水を汲み入るゝこと八

分目餘、用意すれば直ちに走りて、一本榎の洞より數十

うくちなはとらきた 條の蛇を捕へ來り、投込むと同時に目の緻密なる筈を蓋ひ、上

には犇と大石を置き、枯草を燻べて、下より爆※と火を焚けば、

ながむし 長蟲は苦悶に堪へず廻轉り、遁れ出でんと吐き出す纖舌

ほのほ 炎より紅く、筈の目より突出す頭を握り持ちてぐツと引けば、

せぼね 脊骨は頭に附きたるまゝ、外へ拔出づるを棄てて、屍傍に堆く、

湯ゆの中なかに煮にえたる肉にくをむしや——むしや喰くらへる様さまは、身みの毛けも
 戦よだ悚おどつばかりなりと。

(應おう)とは残ざんにん忍にんなる乞きつ丐かいの聚しう合がふせる一いち團だん體たいの名ななること
 は、此このいち一おを推おしても知しる可べきのみ。生いける犬いぬを屠ほふりて鮮せん血けつを
 啜すること、美うつくしく咲さける花はなを蹂じう躪りんすること、玲れい瓏ろうたる月つきに向むか
 うて馬ば糞ふんを擲なげうつことごとの如ごときは、言いはずして知しるべきのみ。

然しかれども此この白はく晝ちう横わう行ぎやうの惡あく魔まは、四し時じ恆ねに在ある者ものにはあ
 らず。或あるは週ひしうを隔へだてて歸かへり、或あるは月つきをおおきて來きたる。其その去さる時とき來きたる
 時とき、進しん退たい常じょうに頗すこぶる奇きなり。

一人にん榎のきの下もとに立たちて、「お月つき様さま幾いくつ」と叫さけぶ時ときは、幾いく多たの
 (應おう)等ら同どう音おんに「お十じふ三さん七ななつ」と和わして、飛ひ禽きんの翅つばか、走そうじ

獸うの脚あしか、一いち躍やく疾走しつそうして忽たちまち見えみず。彼かの堆のうく積たかめる蛇くちなの屍はかばね
 も、彼等將かれらに去さらむとするに際さいしては、穴あなを穿うちて盡ことく埋うづむるな
 り。さても清風せいふう吹ふきて不淨ふじやうを掃はらへば、山野さんや一いつ點てんの妖氣えうふんを
 も止とめず。或時あるときは日ひの出いづる立山りふざんの方かたより、或時あるときは神通じんつう
がはにつぼつうみの海さかより溯えのきり、榎このかげの木蔭くわいに會あひがふ
 川を日没にの海うみより溯さり、榎えのきの木蔭こかげに會くわい合あして、お月つき様さま
 と呼よび、お十三じふさんと和わし、パラリと散ちつて三々さんく五々ごご、彼杖かのつゑの
ひところえうふんひととおそへんげんしゆつほつきはま
 響ひびく處ところ妖氣えうふん人ひとを襲おそひ、變幻へんげん出しゆ没つ極ほりなし。
 されば郷屋敷田畝がうやしきたんぼは市民しみんのために天工てんこうの公園こうえんなれども、隱い
 然ぜん（應おう）が支配しはいする所ところとなりて、猶餅なほもちに黴菌かびあるごとく、薔しやう
びに刺とげあるごとく、渠等かれらが居きを恣しにする間あひだは、一人にんも此この惜をしむべ
 き共き樂よろの園そのに赴おもむく者ものなし。其去そのつて暫時ざんじき來きたらざる間あひだを窺うかがうて、

老若争うて散策野遊を試む。
らうにやくあらせ さんさくやいう こころ

さりながら應が影をも止めざる時だに、厭ふべき蛇喰を思ひ
おうかげ とぎ いと へびくひ おも
 出さしめて、折角の愉快も打消され、掃愁の酒も醒むるは、
いだい せつかく ゆくわい うちけ さうしう さけ さ
 各自が伴ひ行く幼き者の唱歌なり。
かくじ ともな ゆ をさな もの しやうか

草を摘みつつ歌ふを聞けば、
くさ つ うた き

拾乎、拾乎、豆拾乎、
ひらを ひらを まめひらを

鬼の來ぬ間に豆拾乎。
おに こ ま まめひらを

古老は眉を顰め、壯者は腕を扼し、嗚呼、兒等不祥なり。
ころう まゆ ひそ さうしや うで やく あゝ こら ふしやう
 輟めよ、輟めよ、何ぞ君が代を細石に壽かざる！
や や なん きみ よ さざれいし ことぶ

などと小言をおつしやるけれど、拾はにやならぬ、い
こごと ま ひろ
 んまの間。

斯くの如く言消して更に又、

拾乎、拾乎、豆拾乎、

鬼の來ぬ間に豆拾乎。

と唱へ出す節は泣くがごとく、怨むがごとく、いつも（應）の
 來りて市街を横行するに従うて、件の童謡東西に湧き、南
 北に和し、言語に斷えたる不快嫌惡の情を喚起して、市人
 の耳を掩はざるなし。

童謡は（應）が始めて來りし稍以前より、何處より傳へたり
 とも知らず流行せるものにして、爾來父母梯のつくり、112-
 兄が誑しつ、賺しつ制すれども、頑として少しも肯かざりき。
 都人士もし此事を疑はば、請ふ直ちに來れ。上野の汽車最後

の停車場ステーションに達たつすれば、碓氷峠うすひたうげの馬車ばしやに揺ゆられ、再び汽車ふたゝきしやにて
 直江津なほえつに達たつし、海路かいろ一文字いちもんじに伏木ふしきに至いたれば、腕車わんしや十錢せんとやま富山に
 赴おもむき、四十物町あへものちやうを通とほり抜ぬけて、町盡まちはずれの杜もりを潛くづらば、洋々やうく
 たる大河たいがと共に漠々ぼくくたる原野げんやを見みむ。其處そこに長髮ちやうはつ敵衣へいの怪
 物わいぶつを見みとめなば、寸時すんじも早く踵はやくびすを回かへされよ。もし幸さいに市民ひしみんに
 逢あはば、進すすんで低聲ていせいに（應おう）は？と聞きけ、彼かれの變へんずる顔がん色しよく
 は口くちより先さきに答こたへをなさむ。

無意無心むいむしんなる幼童えうどうは天使てんしなりとかや。げにもさきに童謡どうえうあ
 りてより（應おう）の來きたるに一月ひとつきを措おかざりし。然しかるに今は此歌このうた
 稀々まれくになりて、更さらにまた奇異きいなる謠うたは、

屋敷田畝やしきたんぼに光ひかる物ものア何なんぢや、

むし 虫か、ほたる、ほたるむし
 虫か、螢か、螢の虫か、

むし 蟲でないのぢや、目の玉ぢや。

頃日けいじつ至る處いたところの辻つじにこの聲こゑを聞きかざるなし。

目の玉めたま、目の玉めたま！ 赫奕かくやくたる此この明みやう星じやうの持もち主ぬしなる、

(應)の巨魁きよくわいが出現しゆつげんの機熟きじゆくして、天公てんこう其その使者ししやの口くちを

藉かりて、豫あらかじめ引いんをなすものならむか。

青空文庫情報

底本：「鏡花全集 卷四」岩波書店

1941（昭和16）年3月15日第1刷発行

1986（昭和61）年12月3日第3刷発行

入力：馬野哲一

校正：鈴木厚司

2000年11月9日公開

2007年2月11日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

蛇くひ

泉鏡太郎

2020年 7月12日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>